

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごのにようぼうごしよ

四糸金吾女房御書

新版
1510
ゝ
1511

しじようきんごのにようぼうごしよ

四条金吾女房御書

ぶんえい

ねん

文永8年('71)

がつ

5月

さい

50歳

にちげんによ

日眼女

かいたい

由

うけたまわ

そうら

お

ふ

懐胎のよし承り候い畢わんぬ。それについては符の

おお

そうろう

にちれん

そうじよう

なか

えら

い

そうろう

よ

こと仰せ候。日蓮、相承の中より撰み出だして候。能

よ

しんじん

そうろう

ひやく

どく

い

く能く信心あるべく候。たとえば、秘薬なりとも、毒を入

くすり

よう

剣

悪怯

れぬれば薬の用すくなし。つるぎなれども、わるびれたる

ひと

なに

ふうふとも

ほっけ

じしゃ

人のためには何かせん。なかんずく夫婦共に法華の持者な

ほけきようるふ

種

継

たま

こい

う

り。法華経流布あるべきたねをつぐところの玉の子出で生

おほ

そうろう

しきしんにほう

ひと

まれん。めでたく覚え候ぞ。色心二法をつぐ人なり。い

遅

そうろう

疾

生

そうら

かでおおそなわり候べき。とくとくこそうまれ候わんず

くすり

飲

たま

うたが

れ。この薬をのませ給わば、疑いなるべきなり。

やみ

ともしびい

あき

じよくすい

つきい

闇なれども灯入りぬれば明らかなり。濁水にも月入り

澄

あき

にちがつ

過

きよ

ぬればすめり。明らかなること、日月にすぎんや。浄きこ

れんげ

ほけきよう

にちがつ

れんげ

ゆえ

と、蓮華にまさるべきや。法華経は日月と蓮華となり。故に

みようほうれんげきよう

な

にちれん

にちがつ

れんげ

妙法蓮華経と名づく。日蓮また日月と蓮華とのごとくなり。

しんじん

みず

りしよう

つき

かなら

おう

た

しゅご

たも

信心の水すまば、利生の月、必ず応を垂れ、守護し給うべ

疾

生

そうろう

ほけきよう

い

し。とくとくうまれ候べし。法華経に云わく「かくのご

みようほう

い

あんらく

ふくし

う

うんぬん

とき妙法」。また云わく「安樂にして福子を産まん」云々。

くでんそうじよう

べんいろう

もう

含

口伝相承のことは、この弁公にくわしく申しふくめて

そうろう すなわ によらい つか

かえ がえ しんじんそうろう

候。則ち如来の使いなるべし。返す返すも信心候べし。

てんしやうだいじん

たま

素

幾

鳴

尊

授

たま

天照太神は、玉をそさのおのみことにさずけて、玉のご

みこ

儲

ひ

かみ

わ

こ

名

とくの子をもうけたり。しかるあいだ、日の神、我が子とな

まさかあかつ

な

にちれん

づけたり。さてこそ正哉吾勝とは名づけたれ。日蓮、うま

たね

そうら

わ

こ

劣

るべき種をさずけて候えば、いかでか我が子におとるべき。

ひと

ほうしゆ

あたいさんぜん

あ

とう

むじよう

ほうじゆ

「一つの宝珠の、価直三千なるもの有り」等、「無上の宝聚

もと

おの

え

しやかによらい

みな

わ

こ

は、求めざるに自ずから得たり」、「釈迦如来「皆これ吾が子

とううんぬん

にちれん

ぎ

変

さち

さち

なり」等云々。日蓮あにこの義にかわるべきや。幸なり、幸

なり。めでたし、めでたし。またまた申すべく候。あな
かしこ、あなかしこ。

ぶんえいはちねんごがつ にち

文永八年五月 日

にちれん かおう
日蓮 花押

しじょうきんごどののにようぼうごへんじ

四条金吾殿女房御返事